

2020年3月22日  
東京聖三教会

1サムエル 16:1-13  
エフェソ 5:8-14  
ヨハネ 9:1-13、28-38

## キリストはあなたを照らされる



*Rabboni, I want to see*

日本聖公会東京教区  
東京聖三一教会

2020年3月22日  
東京聖三教会

1サムエル 16:1-13  
エフェソ 5:8-14  
ヨハネ 9:1-13、28-38

キリストはあなたを照らされる。

司祭 林 永寅

イエス様と弟子たちが道端で生まれつき目の見えない人に出会いました。すると、弟子たちはイエス様にこのように質問をしました。

「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」(2)

イエス様はこのように答えられました。

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」(3)

イエス様当時の社会において、障害者は神様から罰を受けた人であると考えられていました。そして、その罰は子孫にも伝えられるとも思われていました。ですから今日には当たり前のように思えるこの言葉も当時の人たちにとっては型破りなみ言葉でした。イエス様のこのみ言葉には、障害だけでなく、病、事故、貧しさなども、決して罪に対する罰ではないのだという意味が含まれています。

障害は不自由で苦しいものです。だれもが避けたいと思うことです。しかし信仰者にとって障害というものは恵みへの道筋になることがあります。皆さんは、アメリカのヘレン・ケラーという人をご存じでしょう。彼女は視覚障害だけではなく聴覚と言語障害もありました。しかし障害を乗り越えて障害者の権利を取り戻すために活動しながら作家としても活動しました。彼女がこのように言いました。

「私にとって障害は、もはや障害ではありません。それは恵みへの通路です。なぜならば、私は障害を通して他の人が見ることができないものを見ることができるからです。」

彼女がこのように話したのは、障害を通して他の人が見つけることができなかつた恵みを見つけることができたからです。それでは、その他の人が見つけることができなかった恵みとは何でしょうか。それは、「神様が私を愛しておられる」ということです。またこれが神様のみ業です。

これはとてもありふれたお話であると思う方々もいらっしゃるでしょう。そうです。とてもありふれたお話ではあります。しかし、そのありふれた出来事の中から悟りを得ることこそ魂の目が開かれる瞬間です。「神様が私を愛しておられる」ということを悟る瞬間、障害を越えて「救い」の世界に入ります。

わたしは幼いころ小児麻痺にかかりました。それで、片足が短く、歩くのが不自由です。子供の頃友だちにからかわれたこともありました。ですから大人になってからも心の底に痛みを抱いて生きていました。けれどもある日、このような聖書のみ言葉を読んで驚いてしまいました。

「衰えた膝をまっすぐにしなさい。また、自分の足のために、まっすぐな道を造りなさい。不自由な足が踏み外すことなく、むしろ癒されるためです。」(ヘブライ 12:12b-13 聖書協会共同訳)

このみ言葉はわたしにとって恵みになりました。神様がわたしに勇気を与えてくださるということを知ったからです。たとえ、小児麻痺は治らなくても、今それは、大した問題ではありません。そのときから世界がどことなく違って見えました。

今日、ヨハネによる福音書に紹介された視覚障害者はイエス様に出会って目が開かれました。肉体的に治癒されたのです。けれども肉体的に癒されたということよりもっと大事なことがあります。それは、彼がイエス様を通して堅固な信仰を持つようになったということです。魂の目も開かれたのです。従って一編のドラマのように展開されているこの物

語は、ただの一人の視覚障害者の癒しの出来事で終わるものではありません。キリスト信仰者である私たちがどのように生きるべきなのかを示してくれるものでもあります。

信仰者は聖書とお祈り、そして教会での信仰生活を通して神様に会います。癒しと慰めも得られます。喜びと励ましも得られるのです。しかし問題はその後です。信仰生活をしながらも時折試練と苦難も経験することになるのです。今日と一緒に読んではいませんが、視覚障害者が目が開いた後に、経験することがまさにそのような人生を示してくれています。彼の目が開かれたのち、突き当たったのが試練です。人々は彼をファリサイ派の人々の所に連れて行きました。しかし、ファリサイ派の人々は、彼の目が開かれたことさえ信じませんでした。またこの癒しが安息日に行われたのは誤った行動だと考えます。さらにファリサイ派の人々は彼の家族を脅して、彼にも自分に起こった事さえ否認するように強要したりもします。試練であるのに違いありません。

この視覚障害者がイエス様に会った出来事は肉体的な癒しの出来事として始まりました。しかしそれは肉体的な癒しの出来事を超えるのです。すなわち、真理を悟って精神的に、信仰的に成熟していく過程でもあります。今日と一緒に読んだ福音書は、彼が精神的にも信仰的にも成長していく過程を示してくれています。彼は、ファリサイ派の人々が癒しの出来事を否定しようとする、彼らと論争をしました。そしてその論争を通して彼はもっと成熟します。彼はこのように証言します。

「神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです。」

(31-33)

この証言に怒ったファリサイ派の人々は彼を村の共同体から外に追

い出しました。真の人生に目覚めた次に、直面することになったのはまさにこのような試練と苦難でした。

それなら、私たちはこのような試練と苦難をどのように乗り越えて行くことができるでしょうか。この問いに答えを得るためには、イエス様がその視覚障害者をシロアムの池に遣わしながらおっしゃったみ言葉に注目する必要があります。イエス様はこのようにおっしゃいました。

「シロアムの池に行って洗いなさい。」(7)

シロアムの池はエルサレム城の外にあるギホンの泉の水を長いトンネルを通して城内に引き込んで溜めておくところでした。これは、紀元前7世紀ごろユダの王ヒゼキヤがアッシリアの侵入に備えて作りました。アッシリアが侵略してくると、イスラエルの民らはこの水を飲みながらエルサレムを守ることができました。聖書には、シロアムという言葉が「遣わされた者」という意味であると記されています。もしかしたらイエス様は、この視覚障害者が、迫ってくる試練と苦境の中にも自分の信仰をしっかりと守っていくようにという気持ちをもって、シロアムの池にお遣わしになったのかもしれませんが。ヒゼキヤ王の時も神様はご自分の民らとともにおられました。この視覚障害者とも、ともにおられ、私たちとも、ともにおられます。神様は試練と苦しみの中にも、いつも私たちとともにおられるのです。ですから恐れる必要はありません。私たちの人生は神様から遣わされた人生であるからです。

今日、ご一緒に読んだエフェソの信徒への手紙には私たちに勇気を引き立ててくださるためのみ言葉がこのように記されています。

「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」(エフェソ 5:14)

ですから今、障害はもちろん、病や貧しさ、試練の苦しみを経験していたとしても恐れなくてください。神様は私たちが人生の暗い道を歩いても私たちのそばにおられるでしょう。私たちの目を開けてくださるでしょうし、灯になってくださるでしょう。なぜなら、私たちは「光の子」だからです。

障害や病によって苦しんでいる人々に癒しは何より重要です。しかしもっと重要なことがあります。それは揺るがない信仰です。目の開かれた人がイエス様に会って言った言葉に注目してください。彼はこのように告白しました。

「主よ、信じます。」(38)

この告白はファリサイ派の人々による迫害と追放があつたにもかかわらず屈しない彼の信仰を見せてくれます。この告白によって視覚障害者だったこの人は、目が開かれただけでなく「救いの道」を歩むようになったに違いありません。従って、彼の告白は彼だけではなく、私たちの告白にならなければならないのです。ですから障害はもちろん病や貧しさ、試練と挫折の苦しみを経験していても勇気を出してください。そして揺るがない信仰を持って神様に告白してください。そうすれば、神様は私たちのそばにいらっしゃって私たちを「救いの道」に導いてくださるでしょう。そしてこの信仰によって私たちがいま経験しているコロナウイルスの事態をも乗り越えることができるでしょう。

この一週間、魂の目が開かれ、神様に私たちの信仰を告白し、真の自由を得られますように心よりお祈りいたします。